軍服からのメッセージ

南城市立玉城中学校三年　花城　さくら

ある日曾祖母の遺品整理をしていると、曾祖父母の服が入った棚から、当時の人の悲しい心を表したようなうぐいす色の軍服が見つかった。その軍服は、親族の誰も存在を知らなかった。それが、今後の私の考えを大きく変えていくことになる。

私は戦闘関連の動画や写真、展示物をみることがとても苦手だ。「戦争はダメ」という事実が分かっていつつも、戦争はいつか必ずどこかで起こると考えていて、「戦争から学んだ平和」を受け入れることができなかった。なので、小学生の頃は「いつか戦争はまた起こる。だから、今生きていてもしかたない」という考えを持っていた。戦時中の人々はもっと長く生きたい、幸せに生きたいと思っていたはずなのに、平和の世を生きている私は全く正反対の考えを持っていた。人は必ず死ぬ今を楽しんで何のためになる、何も変わらないでしょ、毎日そう思っていた。

「命を大切にしましょう。」毎年言われてきたが、どのようにして命を大切にするのかも分からない。命が失われることで周りの人は悲しむけれど人類が滅亡すれば誰も悲しまなくなる、そう考えていたときあの軍服が見つかった。

誰も軍服の存在を知らなかったので、なぜ保管してあったのか分からずじまいだった。処分しよう、という話がでたが私の母は、

「きっと何か思い入れがあるはずだから捨てられなかったんだよ。私達、孫や後世に伝えるために残したのかもしれない。私達が保管しなくてどうするの。」

と言った。しかし反対に「後世に伝えるためならどうして私達に何も教えてくれなかったの。」という疑問も残った。私たち家族は悩みに悩んだ末、戦争を後世に伝える施設である平和祈念資料館に保管してもらおうと決断した。それには私も大賛成だった。曾祖母の家に軍服があると考えるだけで不気味で、実際に触るとガサガサした感触で生々しく、今の布と違って重かったのでその時代が伝わってくるようで怖かったからだ。

平和祈念資料館に持っていくと、

「これは戦時中のものか分からないが、可能性としては高いです。こちらで一時的にひき取らせていただいて後日また連絡します。」と言われた。調べてみてもらうとやはり戦時中のもので、こちらからお願いして引き取ってもらうことになった。私はとても嬉しかった。ずっと怖いと思っていた物から開放されたからだ。

しかし本当にこれで良かったのか、ふと考えてしまった。どうして曾祖父母は悲しい思い出が詰まったはずの軍服を捨てなかったのかと。そのことから私は考えた。本当は残したくなかったけれど、私達のような思いを後世の人達には同じ経験をして欲しくない。二度とこのような戦争を起こさないようにするには語り継ぐ必要があるが、口にするのもおぞましい。だから当時の様子が分かるような軍服を残そう。この軍服を残すとしたら、この意味を子供たちに伝えなければならないが、きっといつかは忘れてしまうから、本当のことは言わずに軍服を私達が亡くなった後で見つけてもらって、残した意味を考えてもらおう、と考えたのかと思った。

その答えにたどり着いたとき、私の中で何かがぷつんと切れた。私は今まで何を考えて生きてきたのだろうと。人はいつか必ず死ぬから、死んでも誰も悲しまないからと考えて、生きることの希望を失なっていた。でも軍服を見て、「生きたい」と思っていたのに戦争によって死んでしまった人もたくさんいたんだな、と分かった。私は馬鹿だった。まだ十才にもなっていなかった頃から人生を諦めていたなんて。人生を諦めたくなかったのに強制的に諦めさせられた人達もいるのに私は何を考えていたんだ。平和の世を生きる私達がなすべきことは、ただただ生きていくことだと。ご先祖様ごめんなさい。さぞかし苦しかった時代とは違う時代を生きていく私達を見ていて下さい。あなた達がこの地で出来なかったこと、戦争をさせないこと、という試練を守ろうと誓った。

私はこのことに気づいて、軍服に対して怖さや気味悪いと思っていたことをはずかしく思った。でも、軍服は平和の世を生きている私達へのメッセージを教えてくれた。テレビをつけるとロシアの戦いが流れてくる。そのニュースを見ながら改めて考えた。

軍服からのメッセージを絶やさず伝えていかなければと。